

特集 『道徳科学の論文』を現代によみがえらせる試み

# 「最高道徳」と現代

## ——「和」の思想の再発見——

井 出 元

### 目 次

1. 「和」の文化と現代
2. 古典への問いかけ
3. 廣池千九郎と「和」の思想
4. まとめ—「最高道徳」と「和」の精神—

### 1. 「和」の文化と現代

近年、日本文化論にかかわる書籍が数多く出版され、日本人が改めて自国の伝統的な精神文化に注目するようになった。

稲作と漁撈を営みとする日本の文化は、水を大切にし、資源の枯渇を恐れ、人は自然と共生し、共存していくことを基本とする人生観を育んだ。それはあらゆる出来事に対する寛容さを育み、心の平安を第一とする穏やかな文化であり、いわゆる「和」の文化を形づくったのである。そして、国内外の不穏な世情を鑑みた時、今日ほど日本人が大切にしてきた「和」の文化が注目され、期待されている時代はないと考えられる。それに応じるためには自画自賛の日本文化論ではなく、歴史的な事実を踏まえ、比較文明という視点に立った客観的立場からの理解と提案でなければならない。

本研究において「和」の文化に注目する背景には、もう一つの理由がある。それは近年の考古学的な研究により長江（揚子江）流域に存在した古代文明の存在が明らかとなり、黄河流域とは異質な古代文明が存在していたことが判明したことである。この研究成果は、単に古代史研究上の関心にとどまらず、現代に生きる我々にとっても大変興味深いものである。なぜならば長江流域の文明は稲作・漁撈の文化を発展させ、それは北の黄河文明が畑作・牧畜の文化を発展させたのと対照的な「和」の文化を独自に育くみ、それは日本の文化のルーツを示唆するものであったからである。この研究成果は、以前から議論されていた「日本文化の再発見」とか、「日本人らしさの探求」という一連の思潮に重要な示唆を与えるものである。またその長江文明が育んだ「和を貴ぶ」という精神文化に注目

した川勝平太氏は、北方の「敵を作る文明」に対して「和をなす文明」と意義づけ、長江流域に発達した文化には21世紀を切り開く文明があるとして梅原猛氏は「稲作文明が世界を変える」という提案をしている。この意味において、古来、わが国において尊重されてきた「和」の思想は、今まさにブームなのである。

## 2. 古典への問いかけ

人生に対する根本的な問題を問う。人とは何か、人生のよろこびとはなにか、激動する世情にどのように向かい合うのか。私たちは心の奥底で、このように自分の生き方の根本を問い質している。これらの問いを古人に向けて発した時、中国の古典は太古の時代から、その解答を見出すための重要なヒントを示し、古人は具体的な実践の指針を提示してくれるのである。その解答を導くためのヒントを「精神的文化遺産」と称したい。「精神的文化遺産」とは過去の文化ということではなく、それが現代においても重要な意味を有し、将来にわたって受け継がれることによって、より豊かな世界を招来するための礎となるものでなければならない。そこで真摯に古人（古典）に問いかけ、そして、古人からのメッセージを虚心に受け留め、それを現実の生活のなかで活かすための道筋を模索したい。これが本研究の主題である。

### (1) 中国大陸における北の文化と南の文化

かつて和辻哲郎は『風土』を表わし、精神文化に及ぼす風土的な影響を論じている。精神文化の特質が、それを育んだ風土によって形成されるという指摘は文明・文化の特色を考える上で重要な示唆を与えるものであった。

先に述べたように長江流域の発掘と研究の進展により、二つの大河によって育まれた対照的な文化の存在が明らかとなった。中国大陸の北方は山岳地帯が多いため、その移動手段は馬であり、南方には水郷が多いため、その移動手段は船であった。黄河流域の風土と生活習慣は中国大陸の北方の文化を特色付け、長江流域のそれは南方の文化を特色付けた。つまり、馬に象徴される「乗る」文化と、船に象徴される「乗せる」を育んだのである。

**南船北馬** 所謂「南船北馬」とは交通手段に象徴される文化の個性を表現したものである。たとえば、集団を統率して移動する場合、騎馬隊ならば、その首領は先頭に立って馬上から部隊を率いていくのに対して、船の場合、船長は船尾に立ち、全体を見渡しつつ、部隊を乗せて移動する。ここに対照的な指導者のあり方を覗うことができ、好対照をなす「君子」（指導者）像を育んだのである。

また、その気候や土地柄から北方は小麦を栽培し、牧畜を行なうのに対して、南方では、稲作と漁労を営んだ。耕地面積を必要とする小麦の栽培と牧畜を営む北方の地域では、新たな土地の開拓と獲得は必須であり、部族間の闘争が頻繁に行なわれた。団結して敵対する場合、男系のつながりを中心とした「縦の秩序」を重んじられ、規律を守ること

が尊重された。そのためには統率の原理を一本化することが不可欠であり、一元（天帝）を崇める精神文化が創造されるのである。そして彼らには山のごとき不動の信念を貫く強固な意志が求められ、男性的な剛毅さを善しとする精神文化が育まれた。この地域では躍動するエネルギーを象徴する赤は男性の色とされた。

南方においては稲作・漁撈の営みが主となり、集落ごとの横の結びつきによる共同作業が必須であり、横の秩序が尊ばれ、順応性や寛大さが大切にされた。彼らは土地を守り、水源の確保と水質の保全を第一とすることから、自然との共生を前提とし、自然界の秩序を尊び、多くの神々を祭った。天変地異の災害に対しても、その不確定な被害にひたすら耐えて生きるという水の如く、川の流れのごとき柔軟なものごとの対応が第一とされた。そして定住する生活環境は家を守るために女系のつながりが主となり、赤は女性の色とされた。ちなみに男性の色は水あるいは海を表す青である。

このような風土による文化の差異は、有為（人為）を尊ぶ北の文化に対して、南の文化では無為（自然）であることを至上とした。ちなみに外から治療を施す鍼灸が北方を起源とするのに対して、湯治や薬膳を勧める医療法は南方を起源とするという。このような医学の差異も、南北で好対照をなしているのである。つまり、中国大陸において、北と南とでは風土的な差異に基づいて対照的な文化が生まれ、相互に表裏を成し、東アジアの文化を形成したのである。

中国の思想の根底に流れるのは「人間の知恵と知識が総力を挙げて解決しなければならない問題は、人間がいかにか人間らしさを失わずにその生を享受するか」という主題である。あくまで現世に生きる生身の人間が、その知性と感性によって実現しなければならない問題について実に周到に考察を加え、解決のための示唆を与えようとしている。後述するように、この主題に対して、北方を代表する孔子は教育の必要性を説き、南方を代表する老子は「常道」の自覚を説いたのである。

そして、彼らが目の当たりにした文化の進歩と平和・幸福の実現にかかわる諸問題は、今日の私たちが抱える危機感に通じるものがある。ここに改めて古典に問いかける意義が有るのである。

## （2）東アジアにおける二つの精神文化の萌芽

孔子と老子 南北の文化の相異には「仁者は山を好む」と説いた孔子と、「上善は水のごとし」と説いた老子という二人の思想家を輩出した。

古代中国における思想・哲学は、神秘的、宗教的な絶対者（天・天帝）に統括されていた。この世界観に対して、天のもとにおける人間を開放し、その理性の存在を明確にしたことが孔子の思想の核心を為している。これに対して人間の知恵、技巧の進歩、文明の進化に対する根本的な疑問を懐き、物質文明の桎梏からの開放を説き、「人」としての尊厳を問うところに老子の立場があった。老子は天のもとにおける人間の自覚を促したことは孔子と同様であるが、孔子が人間の理性により多く期待を寄せているのに対して、老子は理性によって眩まされていく人間の感性や感情、直感の復権に期待をよせた。

要するに、孔子は教育によって高められる人間の知性に期待し、限りなく成長する人間の可能性に期待を寄せた。老子は「真実の道」を感得する人の感性に注目し、人間がいかにかに人間らしさを失わずにその生を享受するかを説き、人の持つしたたかな生命力（生活力）に期待を寄せたのである。

時代の進歩に伴う人間の幸福の増進を志向する孔子の立場と、文明の進歩に伴う人間性の破壊に対する懸念を提示した老子の立場。あるいは、理想を高く掲げ人の善意に基づく平和な社会をめざす儒家（孔子）の立場と、しっかりと現実を見据え、一人一人の安心と幸福を求める道家（老子）の立場。これらは、それぞれの役割を担い中国文化に深く根を下ろし、悠久の歴史を経て東アジアの精神文化を形成したのである。対照的な二つの文化は互いに影響しあうことはあっても決して争うことはなく個性を失うことなく、共存し、共栄したことを見落としてはならない。

### （3）孔子における「和」と老子における「和」

「和を持って貴しとなす」とは、私たち日本人にとって特別に馴染みのあることばである。また「和して同せず、同じて和せず」（『論語』子路）とあるように、「和」と「同」との違いは主体性の有無にある。つまり、「和」するためには人に対する温かく繊細な配慮と人間を尊重するという確固とした信念が不可欠となる。「和」とは対立する双方をともに活かすことが重要であり、自分を押し殺して相手に従うのも、自分の意志を通して相手を屈服させるのも「和」ではないのである。これを儒教では「中庸の道」と称し、人倫の要諦として尊んだ。よって「和」を説くことは孔子の教えとして理解されている。

しかし、『老子』にも「和を知るを常と曰う」とある（第五十五章）。孔子の和と老子の和とはどのような違いがあるのか。

孔子は、万物はすべて「天」（自然）の示唆する整然とした秩序によって意義付けられて存在していると考えた。その秩序を天道といい、これに倣って人道すなわち礼が制定され、教育によって和に至る道を開いた。これに対して老子は体験を通して「道」（常道）を自覚し、改めて人生とは何かを考え、現実社会を力強く生き抜き、和を実現するための知恵を提示したのである。

孔子の場合、人と人との和、つまり、人間関係における和を説くことが中心となっている。それに対して老子の場合は、人間をも含む宇宙全体に流れる秩序を「常道」（真実の道）とする立場から、より大きな広がりの中において和を説いたものといえることができる。つまり、「道」を自覚し、それを体現することによって自然界との和、運命や境遇との和、心の内面における和、時代の流れや社会の動向との和など、人間関係にかぎらず、身の回りにおきるすべての事象との「和」を実現することができる考えたのである。

そして、「足るを知るの足るは常に足る（満ち足りているという満足を知る人は、いつでも満ち足りている）」と述べ、「知足」の心境に至ることによって運命や境遇、さらには時代の流れや社会の動向など、身の回りにおきるすべてのものとの「和」を実現していくことができるとしたのである。

**天道と大和** 中国の古代には万物を生成する「気」を「太和」といい、宇宙全体の大きいなる調和を「大和」とする考え方がある。この「大きいなる和」（大自然の秩序）こそが、老子のいう「和を知るを常という」という場合の「和」に当たる。森羅万象、この宇宙の中に存在するすべての物は、常に調和した状態を保っている。その「大きいなる和」を自覚し、「常」（常道）を実現していくことが万物生成の前提であり、人もまた「常道」に従って生活していくことによって生命を全うし、真に豊かな人生を歩むことができ、現実の生活において「和」を実現する事ができると老子は考えたのである。

このような「和」の精神は東アジアで生まれた固有の世界観・自然観によって支えられたものである。「和」（大和）とは、この地上のすべてのもののバランスということであり、一見不条理、あるいは不運に思われる出来事も壮大なバランスの中の必然的な出来事であるとする世界観である。「天なにをか言わん……」といい（『論語』）、「無為自然」を至上の生き方とする思想である（『老子』）。

そして、老子によって開陳された「道」を自覚することによって人はとらわれをなくし、自然体で生きることができるとする哲学は、唯一の価値に目覚めることの重要性を説いたものであり、それは砂漠の民が「神」を創造したことに匹敵する文化史的な意味をもつものである。

要するに、孔子は、実生活の中で「天道」に従って、不動の信念をもって主体的に人間関係の和を実現していくことによって理想社会の実現を期し、客観的な礼の規範によって人々の行動を教導し、物事の正邪・善悪（善不善）・秩序・規律を定めた。これに対して、老子は大きいなる自然の秩序を自覚することを大切にし、心の浄不浄を問い、人としての素直さや自由を尊んだのである。その生き方は潑刺・躍動を尊ぶ孔子に対して、老子は人としての静けさ・落ち着きを重んじている。そして、双方ともに「人間社会における和の実現」を志向したのである。

以上、孔子と老子の思想を中心として中国古代における精神革命と和の思想を俯瞰した。このことから、孔子によると和の実現は飽くまで学問の修得による啓蒙を前提とし、学識豊かな（賢明・博学）君子を目指すものであったのに対して、老子は心の救済を主眼とし、自然体で生きることを尊び、素朴に愚直に生き、邪心を無くし天寿を全うすることが理想であった。成功・名誉を獲得することを重視する孔子に対して、老子は幸福・安心を重視した。さらに人を人間関係においてとらえ社会性（公）を重んじる孔子に対して、老子は生命の尊厳を前提として、養生・長命を説き、人々との共生・共存を理想とした。孔子の説くのが倫理的な和であるとするならば、老子は宇宙的な和の中で人としての歩むべき道を説いているということができるのである。

**日本文化としての「和」** そして、孔子と老子の思想は日本人の精神文化の形成に大きく寄与した。孔子の教えは儒教として官民を問わず「人倫日用の道」あるいは「人倫常用の道」として広く国民に指示され、日本人の勤勉・誠実を尊ぶ国民性を育んだのである。老子の思想は大陸において禅宗を中心とする中国仏教の形成に寄与し、さらに道教という民間信仰として大きく展開した。この道教の展開は日本人の精神生活を豊かにするものであ

った。禅宗は武道や茶道などの日本的な文化の礎となり、道教は神道の成立に重要な役割を果たしているのである。

つまり、日本人の大切にした「和」の文化は儒教・道教を共に受容することによって開花し発展したのである。日本人は、あらゆる矛盾、対立を「和」することによって折り合いをつけ、解決しようとする民族である。それは国と国、人と自然、人と人、そして人と神、さらに自分の境遇や運命など、自分の周りに居るすべてのものに対して「和する」すなわち「穏やかに折り合う」ことを理想とする「和」の文化がある。

今日、日本の文化が注目されていると言った場合、歴史的な遺産や遺跡への注目が主流をなしているが、決して過去の遺産として尊重するものではなく、現実の生活の中で実現していく切実な課題である。それは神や仏によって救われるという文化ではなく、来世や彼岸に人生を託し、救いを求めるのでもない。あくまで現実生活のなかで「和」を求めて自らの道徳的な人生の歩みによって自己の品性を高め、人生を充実させていくという文化である。中でも神道文化は国民性の基盤となり、静寂を尊び、あらゆるものを受け入れていく寛容な精神文化を形成したのである。それは、より多く南方の文化を引き継ぐものであった。

**老子と現代** 『老子道徳経』が成立したのは今から二千年以上の前の時代である。当時は戦乱の世であると同時に文化が発達し始め、人々は競争社会に巻き込まれて、心の安らぎを見失いつつある「不和」な時代であった。その中で老子は自分の本来の姿を見つめ、もっと楽な気持ちで穏やかに生きることを提案し、そのためのヒントを提示した。「大器晩成」「和光同塵」「上善は水のごとし」などのことばは乱世を生き抜き、「和」を招来するための知恵であった。

しかし、老子は、今生きている私たち一人一人に対して、人生に最も必要なことは何かを改めて考えようと呼びかけることに止まり、決して答えそのものを与えてくれるわけではない。敢えて解答の提出を保留することによって私たち一人一人が静かに人生を顧み、自らの進む方向を自分自身で決めるための「場」を用意したのである。

私たちは家族や同僚・友人など周りの人とのかかわりの中で楽しさや安らぎを味わう。しかし、私たちが悩んだり、怒ったりするのも人との関わりや周囲の人との関係である。つまり、人間関係とは親愛、友情あるいは切磋琢磨の関係であると同時に憎悪、対立、相克の関係でもある。社会は個人の自由を保証してくれるものであると同時に、個人の自由を拘束し抑圧する。世間体といったものが私たちの意識や行動を規定していくことは日常の事であるし、形式化した道徳規範や因襲化した慣習あるいは儀礼など社会はしばしば個人の生活を干渉し、その自由を束縛する。老子は、このような現実の社会で葛藤する私たちの傍らで「肩の力を抜いて、もっと穏やかに生きてはどうですか」と、その根本的な解決のためのヒントをことば少なに語ってくれるのである。老子のことばを吟味していくと、個人の人生をより充実させるための一陣の涼風のようなことばと出会うことができ、現代社会に和を招来するためのキーワードを見出すことができる。それは、現代に生きる私たちが共感する考え方や忘れかけていたものの見方を随所に見出すことができるのであ

る。

老子は、私たちの身の回りに無限に広がる常識の世界に背を向けて脱俗、超俗的に生きることを勧めているのではない。ましてや世間の常識や倫理を守らなくてもよいといっているのではないのである。むしろ現実に行なわれている常識の世界について、その源を尋ねることによってその常識の奥に潜む生命に触れ、世俗の世界に対して悠然と対応し、自然体で生き抜けというのである。そのためには「無為自然」という絶大な主体性が不可欠であった。

老子が「無為自然」を説くのは、自然界の法則に対して無為に対応するだけでなく、実社会の道に対して無為であれというのである。そのためには自分自身の主体性の根源をあきらかにしなければならず、それが所謂「常道」(道)なのである。

また儒家(孔子)の立場は文化人を支えるものであり、時代の進歩に伴う文明の進歩、すなわち文明進歩の「功」に期待する立場である。これに対して老子は戦乱の世に生きる民衆に語りかけ、文化の進歩の「罪」・「負」の要素に注目している。文明の進歩に対して恩恵を感じるのはいままでもないが、その進歩した文明によって翻弄される人がいることも事実である。文化の進歩の功罪は現実に生きる私たちの脳裏をかすめる問題であるが、文化の進歩にともなって、改めて「心の時代」といわれ、「生命の尊厳」が問われている現代において、紀元前より人間の尊厳を「全生」(与えられた「生」を全うすること)という視点から説き起こし、いち早く文化の進歩の「罪」「負」の要素に注目している道家(老子)の思想は興味深い。

そして、「人を知る者は智なり、自ら知る者は明なり」とし、「人に勝つ者は力有り、自ら勝つ者は強し」ともある(『老子』三十三章)。老子は、外に向いている目を内へ向けることを説き、他人と競争して勝ちを求める心を自分自身の心の豊かさを尊ぶ方向へとときりかえることを提唱しているのである。ここに「和」を考えるに当たって『老子』に注目した理由がある。老子の考え方には日本人の世界観(自然観・人間観や宗教観)に通じ合うものがあり、それは影響を受けたというよりも、同一の風土によって育まれた精神文化であり、稲作・漁撈を生活の基盤とする長江文明と日本文明との通底の考え方である。

### 3. 廣池千九郎と「和」の思想

廣池千九郎が注目した日本の伝統的な文化とは、これら東アジアの精神文化を統合するものであり、先に述べた「和」(「大和」という考え方はモラロジーの根底に受継がれている。つまり廣池は自然界の法則を「天地の公道」と称し、モラロジーの教学の根底に据えた。それは孔子の「天道」、老子の「常道」に相応するものである。このことを最も端的に示しているのが、『道德科学の論文』第二版の自序文の冒頭のことばである。すなわち

天地剖判して宇宙現出し、森羅万象この間に存在して、いわゆる宇宙の現象を成すに至れるは偶然にして然ることは出来ないのである。(①1頁)

先に述べた「和」（「太和」）という世界観は廣池の一連の日本文化の研究と自らの体験を介してモラロジーの道德論の根底に受継がれている。では、廣池はどのような経緯を経て、「和」の文化を受容し、モラロジーを形成したのであろうか。

#### （1）日本国体の研究と「和」の精神

廣池千九郎研究に携わって最も強く感じることは「日本文化への造詣」の深さである。それは少年時代に先鞭を付けられ、その研究業績としては『中津歴史』にはじまり、『皇室野史』、『伊勢神宮とわが国体』、『日本憲法淵源論』と展開され、やがて『道德科学の論文』へと収斂されていった。この学問遍歴について、廣池は「予定したものであった」と述べている。廣池の学問領域は広い範囲に及ぶが、一貫した主題のもとに展開されたものであった。この間の経緯については煩雑であり、すでに著書のなかで詳述したので省略するが、周知のように廣池は、随所でモラロジーの研究は日本の国体の研究に端を発し、それを基盤として展開したものであるとしている。日本国体の研究とは、歴代の天皇および皇室に関する研究、さらに皇室と日本国民とのかわり方の研究をとおして、日本人の国民性を明らかにすることを意味している。つまり、廣池の学者としての根幹をなすものは日本の伝統的文化の特質の解明であったのである。

さらに日本人に「教育」を通して日本の精神文化を伝えたいという意識は主著『伊勢神宮』の主題にかかわるものであり、その結論である「慈悲寛大自己反省」という精神は日本の皇室に一貫して流れる聖徳であると同時に、「日本国民の国民性」であると述べている。

そして、「世界の道德は温和平和へと進む」として（日記②15頁）、日本人を「平和愛好の民」「世界における最も温和平和なる国民」と評し、「道德性に富める民族」として日本人の育んできた精神文化の、世界平和への寄与を提唱した。つまり、この日本人の「和」を貴ぶ穏やかな国民性は将来にわたって平和な世界を築くために大きく貢献するものであり、このことを日本人はしっかりと自覚しなければならないというのである。

日本国体の研究を通して、日本民族の特質を「慈悲寛大自己反省」の八文字に収斂した廣池は、この精神文化を保有するので日本民族は世界において最も「温和・平和な民族」とであると確信し、大正時代の国策にしたがって国民道德の振興に尽力したのである。

曰く「日本人は天性、温和平和を好み、上品に生まれついている」「このような世界第一の温和平和な日本国民は何かひとつ卓異せるもの」をもっているはずである、しかし、日本人の温和な性格は誤解され、それが日本人の気後れの一因となっている、と。

特に廣池が注目したのは日本人の権利意識である。すなわち、日本人が「権利」の主張ということにあまり頓着しないのは、もともと「為すべきことを為す」つまり「義務」をまず考える国民性に根ざすものであり、決して意志の弱いためではないことを強調している。つまり、この義務を尊び、もの事を穏やかに解決していくことが「和」の国民性の特質であり、「その精神の自覚と普及の如何は我が国の盛衰にかかわり、さらに将来世界の政治外交立法及び教化の基礎となり、人類の幸福、文化の原動力となりうるもの」である

として、「和」を尊ぶ民に期待を寄せているのである。

さらに重要なことは、廣池にとって「日本の伝統的文化」とは単に学問上の関心にとどまるものではなく、また啓蒙活動に終始するものでもなく、それを自己の日常における諸活動をとおして体現すべきものであったことである。

「慈悲寛大自己反省」とは、日本人としての自分自身の生涯において実現していかなければならない課題であり、それは「和」を実現するための根本的な「心のありかた」の核心であった。いいかえれば「慈悲寛大自己反省」を胸中に実現し、日本人として日本の精神文化を実生活において体現することを自らの人生の課題としているのである。後述するように、『廣池千九郎日記』に日々記された記事は、この「和」を求める軌跡を留めている。

## (2) 老子と廣池千九郎——信仰に生きる求道者としての人間像——

廣池千九郎は「最高道徳」を実践した人物として孔子をもって「聖人」と位置づけ、その学統・道統に列している。苦難に耐え、教育を重んじ、道徳行為の重要性を説き続けた孔子は廣池千九郎にとって師であり、祖述すべき精神的な伝統であった。廣池の信条とするところは天命に従って人事を尽くす孔子の生き方に通じるものがあり、教育と学問に生涯を賭けたその人生と重なっている。

しかし、その人生の行路を仔細に見ていくと、そこには信仰に生き、ひたすら道を求める生き方がある。『廣池千九郎日記』には「心身に閑暇ありて、瞑想、深思する必要あり」とあり(③213)、また「山水に隠れて不朽の道を樹つ」とも記している(④99)。この記事に記されている廣池の生き方は、孔子の生き方よりも老子の哲学に通じるものである。先に述べたように、老子は稲作・漁撈を営む日本人の精神文化の形成に大きく寄与した思想なのである。そして、「日記」に吐露された心情の告白は老子の哲学に符合するものを見出すことができるのである。

無為(無為自然)と無我(自我没却) まず注目したいのは老子の所謂「無為」・「無為自然」という考えと廣池の「無我」あるいは「自我没却」という考えとの共通点である。まず老子には有名な「其の光を和らげて、その塵に同ず」ということばがあり(第四章)、廣池の説く「最高道徳の格言」には「光を和らげ塵を同じくし独立して独行す」とある。この「光を和らげる」とは「自我」を没却することであり、最高道徳実践の要諦としている。この点に注目して老子の思想と廣池の実践の姿を考察してみよう。

『老子』には

無為にして為さざるは無し。(第四十八章)

無為を為せば、則ち治まらざるは無し。(第三章)

柔弱は剛強に勝つ。道は常に無為にして、而も為さざるは無し。(第三十七章)

無為にして為さざるは無し。(第四十八章)

とある。老子の説く「無為」とは何もしないということではなく、物事を為す場合に自分中心の作為をせず、ひたすら道(自然)に従うことであった。

この「無為」の思想は、廣池の日常における「我」と対峙し、ひたすら安心の境地を求め意志に通じるものがある。例えば『廣池千九郎日記』には、「一切我がすると思うなかれ」(①226)、「不足、不平、慾、高慢を忘れて、我が身なしの心になること」(②75)、といい、「なるよう行くよう時節を待つ」(①231……他)、「急き込むな、時節を待て」(①223)、「時をまつ、永きのどかな」(②33)とある。

「時節を待つ」「時をまつ」とは自然の時機に身を任せるということである。このことは「老子」には「動には時を善とす」(第八章)とある。「時」とは人力を超えた天の示す時機である。老子は「無為自然」を説いたことは有名である。また廣池は「これというて何事も計画せず、自然に任すること」(②75)とも記している。老子も廣池もともに大自然の懐に懐かれ、生かされているという自覚を求めることによって我執を無くすことを説いているのである。

さらに廣池は「時節」を「神」と置き換えることによってさらに実践的な要素を深めている。いわく、「何ごとも一切神様に任せて、考慮をせぬこと」(②29)、「一切神にもたれ、自然の心使いをする」(③9)と。「自我没却神意同化」とは、廣池晩年の境地を示すものであり、「道」(常道)の自覚を提唱する老子の立場に通じるものである。

また、廣池は自我と対峙し、「自分が偉い、自分がえらいと思い、且つ自分には信仰が十分にあると思う心使いが大なる誤りなり」(①231)と記し、さらに「自分の主義、主張を立て、故らに人の意に逆らうことをせず、ただハイハイと人様のいうままになるような和らかな心使いをする」(①258)と記されている。自分の立場や業績に固執する自我と向かい合い、ひたすら「和らかな心」をもとめる姿が記されているのである。そこで思い起こされるのは、老子の「自ら見わす者は明らかならず。自ら是とする者は彰われず。自ら伐る者は功なし。自ら矜る者は長しからず」(第二十二章)、「自ら見わさず、故に明かなり。自ら是とせず、故に彰わる。自ら伐らず、故に功有り。自ら矜らず、故に長し」(第二十三章)ということばである。

このような自我に固執する自分との対峙を経験し、その都度心の安らぎを求めた経験を経て、「最高道徳の格言」の中で「現象の理を悟りて無我と為る」、「無我の心はじめて良果を生ず」、「我これをなすにあらずして、ただこれに服するのみ」、「順応し同化し且つ絶対服従す」「忠誠に努力して要求せず」「謙遜而光」「一長に誇らず心を虚しくして短を補う」という教えを展開しているのである。このように老子の哲学は廣池の説く「最高道徳」の実践の指針に通じるものなのである。

廣池の生涯をとおすことによって「和を実現する教え」として、私たちにとってモラロジーの教学の現代的な意義を考えると同時に、教えの内容をより身近な、切実なものとしてとらえることができるように考えられる。日本人の国民性の根本をなす「慈悲寛大自己反省」の精神をもって(すなわち運命や境遇を全面的に受け入れることによって周囲の出来事に対して温かく寛大にうけとめることができ、伝統の心を心として)「和」を実現しているところにモラロジーの教学の基本があり、現代的な意義を見出すことができる。それは環境のすべてを受け入れることによって生じる「慈悲寛大」の精神と、その行動の基

準を定めるための「自己反省」の教えこそ、現代において私たちが求める日本的な「和」の精神を実現する要諦であり、老子の言う「無為自然」とは、廣池の言う無我（自我没却）に通じるものである。

現代において注目されるのは「寛容」をベースとした精神文化によって育まれた叡智であり、東アジアにおける「寛容」の哲学は『老子』を以って初とする。一昨年『人生に活かす老子』という書物を執筆したのは、私たちが日頃感じている「和」の文化のルーツを探求したものであり、廣池の道徳思想の現代的な意義を問うためのベースとなっている。この点については紙面の関係上、抄録とした。

### （3）廣池千九郎の人生に学ぶ和の諸相

ここで目を転じて、モラロジーと「和」の実践について論じたい。廣池はその人生の中でどのように和を実現しようと試み、また、そうした人生経験を経て、どのような考え方や提案を後世に遺したのであろうか。

ここで問題としたいのは、「和」を実現する場についてである。では、「和」とは、どのような「場」において実現していくものなのか、特に個人の生き方としての「和」（和する）には、どのような心得と意志が不可欠なのかという問題意識を念頭において、廣池の人生をとおすことによって「和」という考えの拡がりを考察したい。それは「最高道徳（慈悲寛大自己反省）」を現実において生かしていく場を示唆されると同時に、「和」という精神の現実的な意義を確認することができるのである。

なお、この点については既に『モラロジー研究所報』（2010年10月号）紙上に発表したもので、その要点をあげれば以下のとおりである。

病とともに生きた廣池の人生は自然への畏敬（因果律、信仰心）を深め、救済を念として、心身の和を求め、情理の和を求め、運命や境遇との和を求めて、ひたすらに歩み続けたものであり、さらに理想と現実（境遇・立場・年齢）との和を求め時勢の推移との折り合いを求め続けたものであった。このことによって「慈悲寛大自己反省」のことばの広がり、「和」を実現する（発揮する）場を示唆されるのである。そして、それは日本人の国民性を示す「慈悲寛大自己反省」（慈悲寛大とは自らの運命や、境遇を全面的に受け止めた時に生ずる心であり、自らの歩みを常に伝統の心を基準として修正していくことを自己反省と称した）という精神に立つことによってはじめて実現するものであるとするのが、廣池の立場、すなわちモラロジーの立場である。

## 4. まとめ——「最高道徳」と「和」の精神——

文明が発達し文化が進歩するのにもなって道徳も進化しなければならないとし、日本の将来をリードする道徳思想は日本の風土に根ざした固有の精神文化を継承するものでなければならない。この考えは、廣池の生涯に一貫する信条であり、新たな道徳を探求することは畢生の課題であった。

そして、廣池の体験をとおして見ると、そこには「和」を貴ぶ日本人の国民性に発揮する「場」を具体的に示唆されるのである。それを自らの人生に照らしたとき、モラロジーの現代的な意味を示唆するものである。

全てのできごとに対して、「和」を実現していくための根本的な精神を示したものが「慈悲寛大自己反省」ということばで表された日本民族の特性である。いいかえれば廣池にとって「慈悲寛大自己反省」とは、人と人、人と社会、現在と過去、社会の情勢、国家の体勢との「和」を実現し、自らの人生を充実した豊かなものとしていくことを第一として、世界の平和を求めるための原理である。そして、廣池が身をもって示したものが、「最高道徳の格言」によって開示したモラロジーの教学（実践のための指針）であった。とりわけその求道の生き方は老子の無為自然の哲学に通じるものであり、稲作・漁撈の文化が育んだ「和」の思想に通じるものである。

このように「和」という視点から、廣池の人生を回想することによって、私たちは改めて日本人の尊んできた「和」の精神の理想の高さと広がりを知ることができ、今日求められている「和」の精神文化の具体的な内容を理解することができる。そして、和する主体（本人）の在り方を示唆する教えとしてモラロジーの教学を位置づけることができるのである。本稿の冒頭で述べた「日本人の和の精神」に期待を寄せている現代の動向に対して、廣池の生涯をとおすことによって改めて「日本人とは何か」という問いに対してモラロジーの立場から回答を用意することになるのである。

要するに、廣池が目にした日本人として世界の平和、人類の幸福に寄与し得る要素、すなわち世界の平和の指針となり得る日本独自の文化を、私たち自身が正しく理解し、それを日本人として明確に自覚することが重要な課題であると考えられる。このことによって現代、改めて注目されている「和」の文化の広がりや深さ、そして、実生活に活かしていく道を見出すことができると思われる。

（キーワード：和の思想、南船北馬、孔子と老子）